

下から見ると

荒川 英

昭和22年6月28日、私どもを乗せた復員船・輝山丸は、佐世保に向けて、シンガポール・セレーターを出港した。

私は、部長および理事としての二度の勤務を通じ、8年間アジ研にお世話になった。この間に、アジ研内外の多数の人々との出会いに恵まれ、また未知なる地域との接触を通して、貴重な人生経験を積ませていただいた。感謝の念に堪えない。

しかし、私のアジアとの最初の出会いは、戦争中であった。とりわけ、マレーでの終戦、これに続く2年間のシンガポールでの捕虜生活は、かなり衝撃的経験であった。

下から上を見ると——上下とは、いささか乱暴ではあるが、捕虜だからこれ以上下はない——人々やグループについて、それらの力関係と信頼度（credibility といってもよいようなもの）が、よく見える。細々とした体験を積み重ねるにつれて、現地の人やグループの信頼度についての私なりの評価は、否応なしに少しずつ、沈澱し固まっていったように思える。

この評価は、その後のアジ研勤務、これに伴うアジアの人々との交流を経ても、大きくは変わることはなかった。勿論この内容を口にする事はタブーであったし、今日でもそうだと思う。

ひるがえって、今や日本人、日本の会社、団体、政府は、外国のこれらに対して、いわば上に立っている面が多い。会社、団体、政府も所詮は人の集まりである。日本人一人一人が下から見られている。通常時に影響力を持つものは、供与される利益であろう。信頼度はあまり影響を持たない。しかし、決定的瞬間において、最大の影響力を持つものは信頼度への評価ではないだろうか。金満日本の平常時代は、何時まで続くであろうか。一人一人の日本人の言動が、アジアの人々に、日毎、日本に対する信頼度評価を刻印しつけているのではなかろうか。

（産業研究所長）

アジ研と過ごしたむかし話

岸 薫 夫

大学でも殆んど法律の勉強などせず、文学や哲学の同好会をつくったり、マスコミでは反暴力団キャンペーンで暴れまくったり、そのあげく健康を害して、静養してもう一度充電するには役人という職業がいいとすすめられ、偶然にも役人になったほくだから、役所の方で面くらったに違いない。この年になって解ってきたことだが、人間には生れ持った型があり、型と仕事が食い違くと、大変に不幸な人生を歩むような気がする。かくして役人では一寸使いものにならないと判断されたほくを、しばらくアジ研という出来たてほやほやの研究機関に出してくれた上司達はとても賢明であったし、いまでも感謝している。それほど、初期のアジ研において、ほくは勝手気ままな議論をし、自由を満喫できた。日本経済もまだ素朴な段階にあったし、発展途上国を研究するといっても、上から下へという雰囲気ではなく、何となく友人とのつきあいという感じがあった。ただ、われわれには長いそして知的水準の高い先輩達の学問的蓄積をうけついできたから、途上国を勉強する能力にはすぐれていたし、こちらから教えてあげられる分野も相当にあった。

たとえば、国の財政の基本になる税制があった。アジ研でほくが途上国税制をとりあげたのは全く偶然だった。当時の大蔵省主税局税制一課長が塩崎潤氏（現衆議院議員）で、首席補佐が安井誠君（現東邦生命相談役）だった。たまたま安井君をたずねた時、彼は学問に近く行政にも役立つ研究として、途上国の税制研究と指導を行うようほくに提案した。それが随分長く続いて、一つの成果を生んだわけだ。

一つの国全体をとらえる「Area Study」という概念も初めてアジ研で教えられた。この方面で傑出した人材が、いまほくのいる国際協力事業団で「国別研究」を随分助けてくれている。30年の歳月がこうした事業団の研究の大変有力な研究戦力を育ててきたわけだ。

ほくは税制研究と同時に当時殆ど知られなかった「中東の石油」の研究に

とり組んだ。官庁エコノミストで名をなした企画庁の高橋毅夫君や、公取の長谷川古君との協同作業だった。しかし、税とちがって、大蔵省という強大な組織のバックを得られず、通産省は、全く「メジャー任せ」という時代だったので、研究にあたった同僚は血の汗を流したものだ。ただ、苦しくとも、いまの時代に欠けてしまった奇妙な自由があった。

こうした途上国研究の先駆者たちの幾人かは、仕事半ばにして無念の死に襲われた。また多くの先駆者たちが、研究の中核体を日本のあちこちにつくり、なかには途上国研究機関の内部にもその成果を大きく開花しつつある。最近きくところによると、アジ研の地方移転が要請されこうした苦しみをともにした同僚が血と汗と涙の跡をにじませているこの研究所の建物から追い出されるという。本当だろうか。歴史的建造物には破壊を許さない神聖な何物かがひそんでいる。西欧の都市はそれをよく知っている。若しそれが本当なら、あの建物の立地の選択に、造形のデザインづくりに、更に資金集めに東京と大阪を汗にまみれてかけまわった東畑精一先生や、総務部長洪沢正一氏の墓は、動てんして、ひび割れするであろう。

(国際協力事業団副総裁)

資料部門 七色の虹

阪 田 貞 宜

わたくしが国立国会図書館をやめてアジア経済研究所にきたのは、理想の資料部門を自分の構想で作ることができると思ったからです。しかし「アジア経済研究所の資料部門はかくあるべし」というのは、一つの夢にすぎませんでした。資料部門には余りにもさまざまな機能が要求されて、そのどれをも満足させることは不可能だからです。遠くから見れば七色の虹も、近づけばあるべき姿はつかめません。資料部門には、対立するいくつかの規準があります。資料部門を一つの姿に描き出せない理由です。例えば、次の通りです。

1 Perspective か, Retrospective か

Perspective とは、Current-awareness とおきかえてもいいでしょう。発展途上国研究は現代研究だから、新聞、雑誌など新しい情報を集めなければなりません。しかし、地域研究をする上で、国々の特性を知る必要があるというならば、Retrospective な、つまり歴史資料も要求されます。研究部門でも地域研究を主とする調査研究部に対しては動向分析部ができました。どちらの規準を主とするのか、その割合はどうかは難しい問題です。

2 Synchronic か, Diachronic か

同じく時間に基づく規準ですが、異なるのは斉合性の座標軸です。地域研究である国を対象にするとき、かならず他の国の特性を参照します。つまり比較研究が有効な手段です。したがって、資料もある特定の分野に関するものを共時的に収集しなければなりません。また量的なデータに基づく計量研究になれば通時的な資料が要求されます。統計部門が独立したのはこの理由からです。研究部門では地域経済の計量分析プロジェクトが生まれました。

3 General か, Specific か

アジア経済研究所は発展途上国に関する研究所として研究対象に大きな枠組はありますが、詰めていくとあいまいです。名称に経済とあるのに政治、法律、社会などさまざまな分野が対象となります。したがって資料部門では、発展途上国に関するものなら何でも集めるということになります。法律資料まで体系的に集められて、法律学者が何人か生れることになりました。逆説的に言えば、規準をあいまいにした方が賢明なのかもしれません。

4 Centralization か, Decentralization か

これは、一つの独立した組織として資料部門を持つことが妥当かどうかの問題です。簡単に言えば、資料の利用か保管かどちらに重点を置くかです。利用に重心をかければ、各研究部門あるいは各研究者が資料を管理すれば便利です。すると体系的な保管ができず、無駄も生じます。わたくしは、投資資料相談室を作ってこの難しい問題の解決のいとぐちを見つけようとしたのですが、残念ながらいつの間にか調査研究部門に吸収されてしまいました。

いま資料部門はエレクトロニクス化の流れに沿って革新の時代を迎えていますが、30年前の初心にかえり、新しい方向と体制への模索が続けられるよう期待します。

(国際ビジネスコミュニケーション協会理事長)

私の中のアジ研

篠 沢 恭 助

1964年4月から66年3月までの2年間、大蔵省からアジ研へ出向となり、派遣員としてアルゼンチンのブエノス・アイレス市に駐在した。また、これを挟む事前の研修・準備と帰国後の整理の時間を合わせると、全部で3年弱の期間をアジ研で過ごさせて頂いた。私の公務員生活は30年を超えたが、略々その1割に相当する部分だ。

振り返ってみると、この時間は、私にとって次のような意味を持っている。

第1に、これは今日に至るまで私の唯一の海外生活体験である。その後予算編成など比較的「国内向け」の仕事に従事することが多かっただけに、派遣員生活は、自分の知験の幅の（それなりの）広さを証明してくれる殆ど唯一の根拠となってきたのである。

第2に、今日でこそ何の珍しさもないこととは云え、4半世紀前におけるラ米滞在経験とかスペイン語屋であることとかの稀少性が、霞が関界隈で、私の「識別」に随分役立ったと思われる。

さらに、第3に、たいへん私的なことで申訳ないが、アジ研の場で家内と知り合うことができたこと、等々。

一方、私の方からアジ研にどれだけの貢献をなし得たのかを問うてみると、まことに申訳ないこと乍ら、お礼奉公で書きとめた一冊の本（アジアを見る眼シリーズ「パンパの発展と停滞」）と、その後若干の「院外团的活動」だけなのである。肝腎のアルゼンチン経済研究との結びつきは、大方、跡形もなく消えてしまい、この国と英国との間のかの有名な抗争に際して、日本の新聞が「マルビナス」紛争とは呼ばずに、専ら「フォークランド」紛争とのみ書き立てることに腹をたて、あるいはマラドーナの活躍に溜飲を下げるだけの「間柄」となってしまった。よって、研究所からすれば私への投資は確実にムダ遣いの部類に分類されてしまうのではないかと、ジクジたる思いにかられるのである。

このように、殆ど一方通行的受益関係にあるだけに、私にとってのアジ研時代の思い出の深さを忖度して頂ければ幸いである。

(大蔵省理財局長)

カルチャー・ギャップ

高橋 達直

米国ミシガン大学のあるアナーバー市は、デトロイトの西方40マイル。春には白いマグノリアや紫のライラックなどとりどりの花が一斉に咲き競う。そして秋は、郊外を広くゆっくり流れるヒューロン川が燃えるような紅葉で色どられる静かな美しい大学町だった。アジ研の在外研究員として同大学の中国問題研究所に派遣されたのは、もう今から20年以上も前になる。「まだカルチャー・ギャップが随分あるでしょうね。」当時の所長でおられた東畑精一先生に出発の挨拶に出向いたときの先生のお話を今でも思い出す。若き留学生として先生が西海岸に上陸されて、公園を散歩していたら、NO PARKING と路上に書いてある。その意味が分らず、多分公園をウロウロするなという趣旨と解して早々に宿に引き揚げたといわれるのだ。

私の時には、そんなことはなかったが、大きな道路、広いショッピング・センター、マクドナルドのハンバーガー。今でこそ見慣れた風景だが、当時は圧倒されたものだった。そしてこれは今でも変らぬが、日本語が通じないのが何よりショックであった。当時ミシガン州はサマータイムを実施して、夏など10時過ぎまで明るく随分と遊べた。秋も近づきその終了が気になり、大学のルームメートに聞いてみた。「サマータイムは何日終るのか。」同僚の

返答は一様に曖昧である。「そのうち終るよ」、「秋が来ればね。」或る朝、授業に出て見知らぬ周囲の顔で私は夏時間の終りを知った。帰って同僚にその不人情を詰問したが、結果は大笑いとなった。Summer Time は夏季のこと。夏時間は Day Light Saving Time という。だから友の答は不確実なものだったのだ。

今思うと本当に楽しい2年間だった。しかし、悲しいことに一緒だった尾上悦三氏が先年鬼籍に入ってしまった。御冥福を祈りたい。因みに当時の研究テーマ「米中関係の歴史的考察」は、今でも研究過程にある。

(中小企業庁長官)

アジ研の思い出

田 中 誠一郎

私のアジ研との出会いは、アジ研が創立され、まだ新大手町ビル内に事務所があった時に始まる。当時通産省官房調査課に勤務中であった私は、机も十分整わない部屋で洪沢さん、藤崎さん達に交って研究テーマ検討のお手伝いをしたものであった。それから30年、創立時の予想を遙かに越えて、アジ研が多く成果をうみ、国際的にも多大の貢献をしている姿に無量の感を禁じえない。

その後縁あって、私自身在外研究員の一人として、西ドイツに派遣されることとなった。ヨーロッパ特に西ドイツにおける開発途上国の研究を調査することが主な研究テーマであった。

1960年の春、アジア諸国を駈足で廻って、目的地の北ドイツの街キールに

到着した。高校以来夢みていたドイツであり、現地事情も勉強したつもりではあったが、当初受けたカルチャー・ショックは大きかった。戦争の傷跡がなお生々しく残ってはいたが、ユーパー・アーレスというドイツの伝統は、見事に蘇生っていた。そのカルチャー・ショックがいえようかという時に、突如としてベルリンの壁建設という衝撃的な出来事が発生した。キールの地方紙は、今にも戦争かという記事を一面トップで飾っていたが、間もなく平穏な日々が戻り、私の世界経済研究所通いが続いた。その間、研究所の人達は勿論、独日協会始め多くのドイツ人から受けた好意の数々が今なお忘れられない。

1年半のキール生活の後、ケルンの貿易研究所に移ったが、その後半は、出発当時指示されたレポートづくりに精を出すこととなった。寒いドイツの冬、レポートの作成に励んだ日々が思い出される。帰国後東畑先生始め皆様のご好意で、レポートは『西ドイツの低開発国援助』というタイトルで間もなく出版された。先日頂いた出版目録の中にこれを見出して感慨を新たにされたものである。

振り返ってみると、この30年は、アジ研から西ドイツに派遣された私にとっては、ベルリンの壁の歴史でもあった。このベルリンの壁の崩壊に象徴される歴史の転換期を迎え、アジ研が更に大きな発展を遂げることを心から祈ってやまない。

(地域振興整備公団副総裁)

インドネシア・バンドンの思い出

中 沢 忠 義

アジア研究足後間もない昭和35年から2年間第一回の海外派遣員として、インドネシアのバンドンに滞在した。

アジア研出向、通産省でアジア諸国への賠償業務に携わったことから、アジアへの関心は高く、特に人口と資源に恵まれ将来性豊かなインドネシアを自分の目で学べることは大きな魅力であった。

渡航ビザの取得には数カ月を要したが、その間大手町の本部で、同僚の派遣員と共に事前の準備もでき、又、所長の東畑精一先生から留学の経験談をうかがったり、親しく御指導をうけることができた。

渡航時の60年代初頭のインドネシアはオランダから独立後の混乱期であり、農園は荒廃し、財政の膨張とインフレ昂進で庶民の生活は困窮を極めていた。バンドン市内でも子供はほとんど裸足であったが、南国特有の陽気な楽天的国民性が救いであった。印象的であったのは、都会、田舎を問わず、インドネシア語による初等教育の普及が徹底され、文盲の一掃が強力にすすめられており、この国の将来に明るい希望を持たせるものであった。

対日感情も良く、受入先のバジャジャラン大学のイワ学長はじめ西ジャワの政・財界の人々からも親切に交友の輪の中に招き入れられた。大学から乞われて日本語科の設立のお手伝いもし、6人の第一期生の修了に立ち合うことができたのも懐しい思い出である。

当時、東西対立の時代に第三勢力の外交をすすめたスカルノ大統領は、国軍と共産党のバランスをとりながら、オランダから西イリアンの奪回・統合に成功した。帰国の年、62年には、ジャカルタに日本の協力による高層のインドネシアホテルが完成し、又、ソ連の援助によるムルデカ（自由）スタジアムでアジア・ゲームが開催された。スカルノ時代の最盛期の象徴的出来事であったともいえよう。2年後の反共産9月革命で誕生するスハルト政権は西側の政治経済体制を選択し、今日のインドネシアの繁栄を導くこととなる

が、その基礎に広大な島嶼国家を統一し、教育の徹底を図ったスカルノ大統領の指導力があつたことを改めて評価したいのは若い日在那个時代に過ごした者の感慨であろうか。

(伊藤忠商事株式会社代表取締役副社長)

アジ研の思い出

森 田 一

昭和34年に東海財務局に行っていた時通産省担当の大蔵省主計局主査からアジア経済研究所へ行ってみないかとお誘いがあった。私は是非外国へ行ってみたいと思っていたところであったので喜んでお受けしますと御返事をした。

東畑精一所長のところへ出頭せよとのことであったので、東畑所長のところにお会いをしに行った。行ってみると東畑所長が言われるには、大蔵省が人を出すかがなかなか決まらなかったのもう東南アジアなどの主要国には派遣される人が決まっている。君は、オーストラリアかトルコかイスラエルかその中から選んでほしいとのことであった。

私は即座にオーストラリアに行かせてほしい旨の返事をした。これが決まったので昭和34年12月には、東海財務局から大蔵省官房付となった。

私はてっきり1月か2月かに出発するものと決め込んでいた。ところが2月になっても3月になってもビザが下りない。いらいらした毎日が5月まで続いた。オーストラリアでは、メルボルンにあるメルボルン大学で研究室を與えられた。ここを根拠地として調査研究し、成果報告をアジ研に次々と送った。東畑所長からは、君の報告書が一番多かったとおほめのお言葉をいただいた。

メルボルンの滞在も半年を過ぎた頃、郷里香川県坂出市の知人から、大平のおやじさんと今の家内の芳子が写った写真とともに先方は承諾しているので、結婚をしないかという手紙が入っていた。私は早速そのようにお願いしたい旨の返事をした。私はそれまでも何度か芳子を見ていたので、案外簡単に決心することができた。当時家内は青山学院大学の学生で19歳であった。

アジ研の思い出はその他にも数多くある。

(衆議院議員)